



謎の超笑力をもつ大魔王が、あなたに贈る不思議なムダ話

発行：トラベル・ミトラ・ジャパン

ぼん子画

(530-0041) 大阪市北区天神橋 1-18-25 第3 マツイ・ビル 201 TEL : 06-6354-3011

お笑いエッセイのメール発信をご希望の方は、ご連絡下さい。(E-mail : daimao@travelmitra.jp)

タトゥーへの視線とイレズミ (2)

朝日新聞 (2025/08/08) 「耕論」:

「薄着の季節、街中で若者を中心に腕などの彫られたタトゥーが目に入ることも。ファッション化が進む一方、日本では入れ墨として忌避もされてきた。分れる視線の先に浮ぶものは」

朝日がこの特集を組んだのは、きっとタトゥーをよく思わない世代が渋い顔をしているのを察知したからであろう。

「耕論」には、三人が登場している。

1. 小林祐希：サッカー選手 (33 歳)。23 歳のときにタトゥーを入れた。

「ファッションというよりは自己表現ですかね」

「日本ではタトゥーがないことにこしたことはありません」

「職業の選択肢が狭まる可能性がある」

2. 鈴木智彦：ヤクザに詳しいライター。

「若いころ、いきがって不良にかぶれ、俺たちはもう堅気にもどらない、一生ヤクザを続ける証し」

「後悔している人も多いです。ぶっちゃけヤクザは大きな風呂が大好きです・・・彫りものを見せびらかしたいのではなく、地域コミュニティーやそこで会う仲間の『風呂とも』が好きなのです」

3. 山本芳美：文化人類学者。

「欧米には独自のタトゥー文化がありましたが、中世以降、罪人の印や、アウトサイダーのものなど負のイメージも生じました」

「大航海時代 (15、16 世紀) になると、主に太平洋の島々からタトゥーが交易品の一つとして、徐々に西洋世界に伝わっていきました」

海軍兵や水夫が各港でタトゥーを入れていった。水死のときの身元証明のため。

「19 世紀後半には、文化的な背景とは切り離されて、目新しい装いの一つとして流行」

「80 年代になると、俳優や歌手、スポーツ選手などのタトゥーがメディアを通じて広がり、ファッションとして一般化」

「19 世紀半ばから 1948 年まで、法的に禁止した日本」

以上のように箇条書きしてみると、大まかなことが分る。

まず、Tattoo を英和辞書でみると、「入れ墨」とある。若い人に「あなたの入れ墨はキレイだね」というと、「入れ墨ではなくタトゥーです」と切り返される。「入れ墨」はマイナス・イメージ、「タトゥー」はプラス・イメージなのである。日本社会はマイナス・イメージ、西欧社会はプラス・イメージである。

2012 年橋下徹大阪市政で入れ墨が問題になったことがあった。市職員の入れ墨は不可とする騒動である。

入れ墨したければ民間に転職しろ、というわけだ。

前述したようにインドでもイレズミは禁止されていた。公務員でイレズミをしている人をみた記憶がない。(神さまの名前程度を彫った人がいたかもしれないが・・・)最近のインドでも「タトゥー文化」としてのイレズミが広がりつつある。しかしながら、神聖な場所、寺院やモスクなどではタトゥーは神聖さの冒瀆とみなされるようである。宗教的身体論に由来するようだが、その底流には非アーリヤ民族に対する差別的な思想があると、わが輩は推理している。インドのタトゥーの位置がどのように変化していくのか関心あるところである。

サッカー選手の自己表現が、ボールをゴールに入れることではなく、タトゥーを入れることだとするのは、どうも合点がいかない。それはそれとして、思い出すのは英国のサッカー選手デービッド・ベッカムである。2002年サッカー・ワールドカップ準々決勝ブラジル戦で惜しくも負けてしまった。試合が終わると、選手同士がユニホームを交換したが、裸になったベッカムの「背中には、十字架を背負うキリストのタトゥー」があったという新聞記事があった。ところが掲載写真には、十字架のタトゥーではなく、左腕に彫られたデーヴァ・ナーガリー文字(インド語)が写っていた。記者はデーヴァ・ナーガリー文字が読めなかったのか、それに言及していない。しかし、わが輩が解読したところ、Vhiktoriya(ヴィクトリヤ)と読み取れた。ぼん子によると、美人の奥さんの名前らしい。

そこでわが輩はよけいな心配をした。

「奥さんと離婚したとき、困るんじゃないの？」

「誰も読めませんよ！」とぼん子が言い放った。

(なるほど・・・)と思ったが、ついでに与太話をしておこう。

立ち飲み仲間の若さんは、自称俳優・シンガーである。沖縄にロケでいったとか、某監督と演劇論を戦わせたとか、歌手の桑田佳祐に「歌が下手だ！」と言ってやったという武勇伝をよく語っていた。その若さんの腕に何やら文字が彫られていた。酔い仲間のだれも読めないデーヴァ・ナーガリー文字であった。「それは○○○という女性の名前だよな」

とわが輩が言うと、ビックリしていた。それは前の前の妻の名前であった。沖縄で入れ墨したが、だれも読めないので安心していた。神さまの名前なら永遠だが、「○○命」や恋人や妻の名前は彫らないほうがよい。人生はコロコロと変わるものだから。

インド(海外)から帰国したら、まず銭湯に行く。広い浴槽から風呂桶でお湯をすくい、頭から三杯ほどお湯をかぶる。それから泡風呂で筋肉をほぐす。完全なるリラックスかと思いきや、少しばかりテンションの針があがる。入れ墨オヤジが、蒸し風呂からでてくるなり、勢いよく水風呂に飛び込む。湯船の縁に両手を突いて腕立て伏せを始める。中年オヤジが元気なのは分ったが、なにを誇示したいのと、わが輩は訝る。暴力団排除条例により入れ墨者銭湯お断りじゃないの、と思うが、廃業に近い銭湯だと入れ墨者も数少ない入浴客である。また入れ墨者にも入浴と表現の自由がある(・・・かも)。

昔、許永中という「闇の紳士」フィクサーが、わがミトラ城近くに住んでいた。ごく薄い繋がりがあったので、もの珍しさに豪邸を見に行っていたことがある。若い者が入れ墨を入れると言ったとき、後悔するかからやめろ、と言った逸話がある。褒めるわけではないが、「大物」は違うものだと酔い話になった。

肉体は老いゆくものである。鮮やかに彫られたタトゥーにしろ入れ墨にしろ、肌にシワが刻まれそこから加齢臭が匂うようになるのが人間である。よくよく人生は長いと思い、身体のあるべき姿を思い浮かべるのもよいだろう。